

# 平成27年度「研究大学強化促進事業」フォローアップ 進捗状況概要 京都大学

## 目的



京都大学「越境する知の拠点」の確立

### 5つの「越境」に挑戦!

- ① 世代と性別を超える
- ② 地域・文化を超える
- ③ 既存の学問領域の枠を超える
- ④ アカデミアと社会の垣根を超える
- ⑤ 既存の組織・制度の壁を超える

## 学際・国際・人際融合事業「知の越境」の実施

**融合チーム研究プログラム【国際型】**  
国際型新領域開拓チーム形成支援

国際

**スーパージョン万プログラム**  
国籍を超えた人的交流・国際力向上

学際

**PM型研究リーダー育成・URA能力向上**  
**融合チーム研究プログラム【学際型】**  
多様な研究者による新領域開拓チーム形成支援

**百家争鳴プログラム**  
異分野交流の場・新しい研究課題の発見

人際

研究支援体制整備

URAの配置と組織整備

人事労務制度改革の実行

## これまでの実績・進捗状況

### 融合チーム研究プログラム(SPIRITS)【国際型】・【学際型】

- ▶ 期間2年のプログラムを毎年度新たに採択
- ▶ 支援プログラム数: 国際型79件・学際型25件
- ▶ プログラム参加者数: 1,132名(海外35カ国からの383名を含む)(\*)
- ▶ 主な成果(\*)
  - 研究会等開催数: 80回以上(うち国際50回)
  - 新規国際共同研究への発展: 15件
  - 学術交流協定4件のほか、特許出願や産学連携の増加にも寄与
  - 支援を通じ、研究マインドを共有するURAを育成

(\*) 支援を終了したSPIRITSプログラム分の実績

### スーパージョン万プログラム

- ▶ 研究者派遣プログラムと派遣元支援プログラムから構成
- ▶ 支援を拡充(支援対象者に任期付研究者も追加、支援期間を最長2年に拡大等)
- ▶ 件数: 研究者派遣プログラム40件(個人及びチーム)・派遣元プログラム29件
- ▶ 派遣先例: ハーバード大学、オックスフォード大学、スタンフォード大学等

### 百家争鳴プログラム

- ▶ 支援及び審査採択スキームを確立し、URAによる面談を通して15件を採択
- ▶ 採択プログラム(研究会・ワークショップ)の例
  - 人工知能が浸透する社会を考える・多言語主義と歴史言語学・科学と芸術の交差点

海外拠点(バンコク・ハイデルベルグ)の設置・運営と北米拠点の設置検討

IR推進室と連携し、研究企画・戦略に資するデータを収集・分析・提供

学内の研究支援ファンドを拡充

学内の各研究支援組織との連携を強化

## 京都大学URAネットワークの構築

**学術研究支援室(本部URA組織)**  
統括・企画部門、産学連携・情報部門  
国際戦略部門、学際融合部門

**部局URA組織(8地区)**

北部地区、吉田文系、吉田南地区、  
医学病院地区、南西地区、桂地区  
宇治地区、吉田理系

**次世代研究創成ユニット**

42名のURA体制

高等研究院の設置準備(最先端研究の展開拠点)

次世代人材育成のためのコンソーシアムを設置

年俸制・クロスアポイントメント制導入  
女性研究者支援の拡充 など

平成28年度よりURA体制を本部一元化  
部局の垣根を超えて全学を俯瞰する体制へ

## 今後の課題と展望

- ▶ 本部一元化体制の下でURAを約50名にまで増強し、部局の枠組みに捉われず、その能力・技能の相乗的な組合せにより支援を実施(オールURA体制の確立)
- ▶ SPIRITS等の学内プログラム終了後もURAによる研究者への支援を継続し、芽生えた研究を本格的な国際共同研究や異分野融合研究として推進
- ▶ 学内特区(能力・実績に応じた処遇等)や、持続的発展を支える組織改革(学域・学系制度)により、研究者が能力を発揮できる環境や人事の透明性を確保

## フォローアップ結果

評点区分: おおむね順調に進んでいる

### 全体を通じた所見

- 「京都大学の改革と将来構想」の一環として、本事業を明確に位置付け、研究支援体制の充実、融合チーム研究プログラム等の実施など、着実に事業が展開されつつあり、おおむね順調に進んでいることが確認された。今後、本事業のロールモデルとして成果の活用を期待したい。

### 特に優れた点

- URAのキャリアパスとして、首席専門業務職、上席専門業務職、主任専門業務職、専門業務職の職位を導入し、昇任・昇級システムが機能している。

### 期待する点

- 平成28年度からの「部局URAの所属を本部学術研究支援室に一元化する「オールURA体制」への移行については、URA配置のスケールメリットを十分活かすとともに、多様なニーズに応じた研究支援活動が展開されるよう、取組を適切に進めることを期待する。